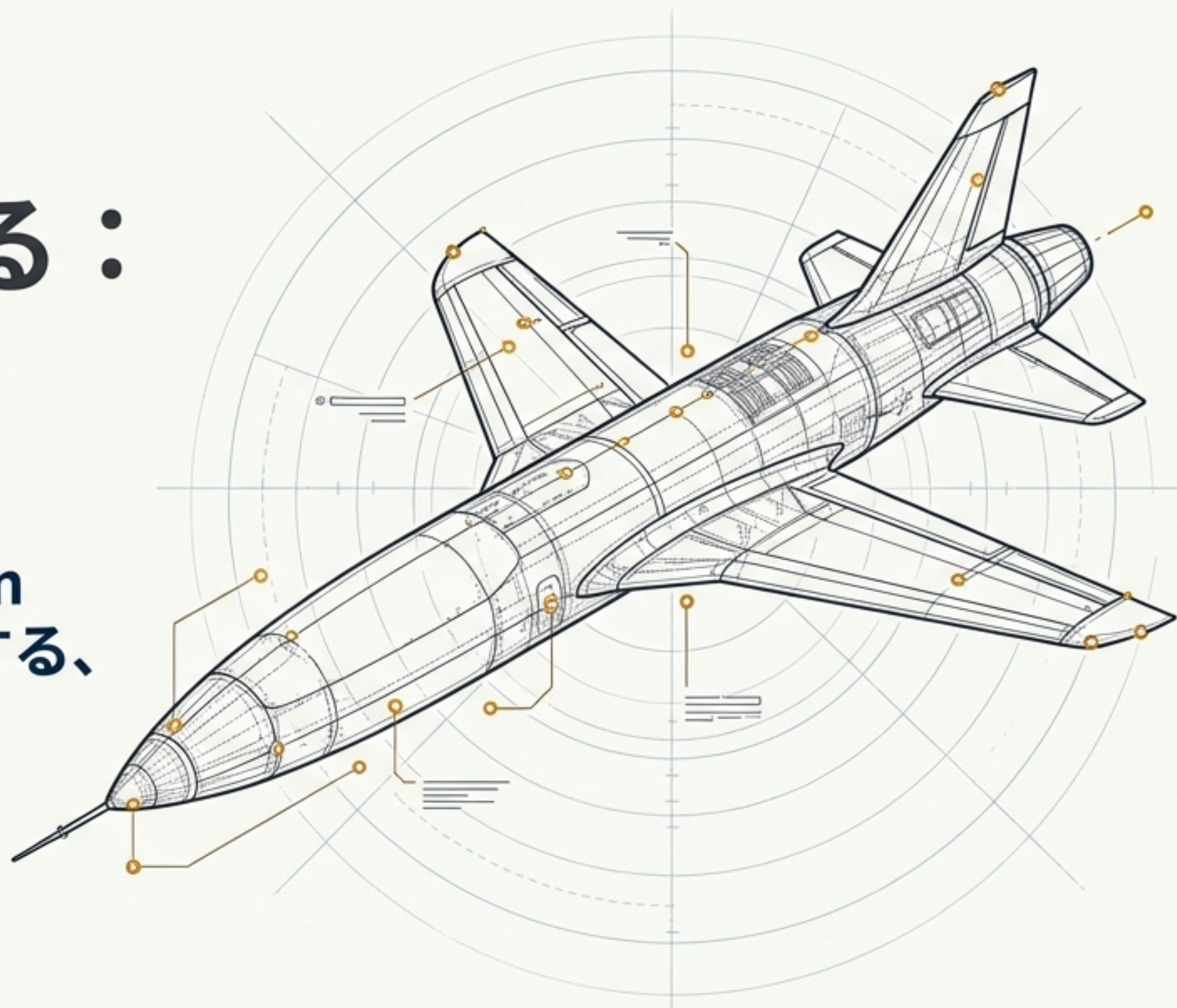


DECLASSIFIED STRATEGIC WHITEPAPER

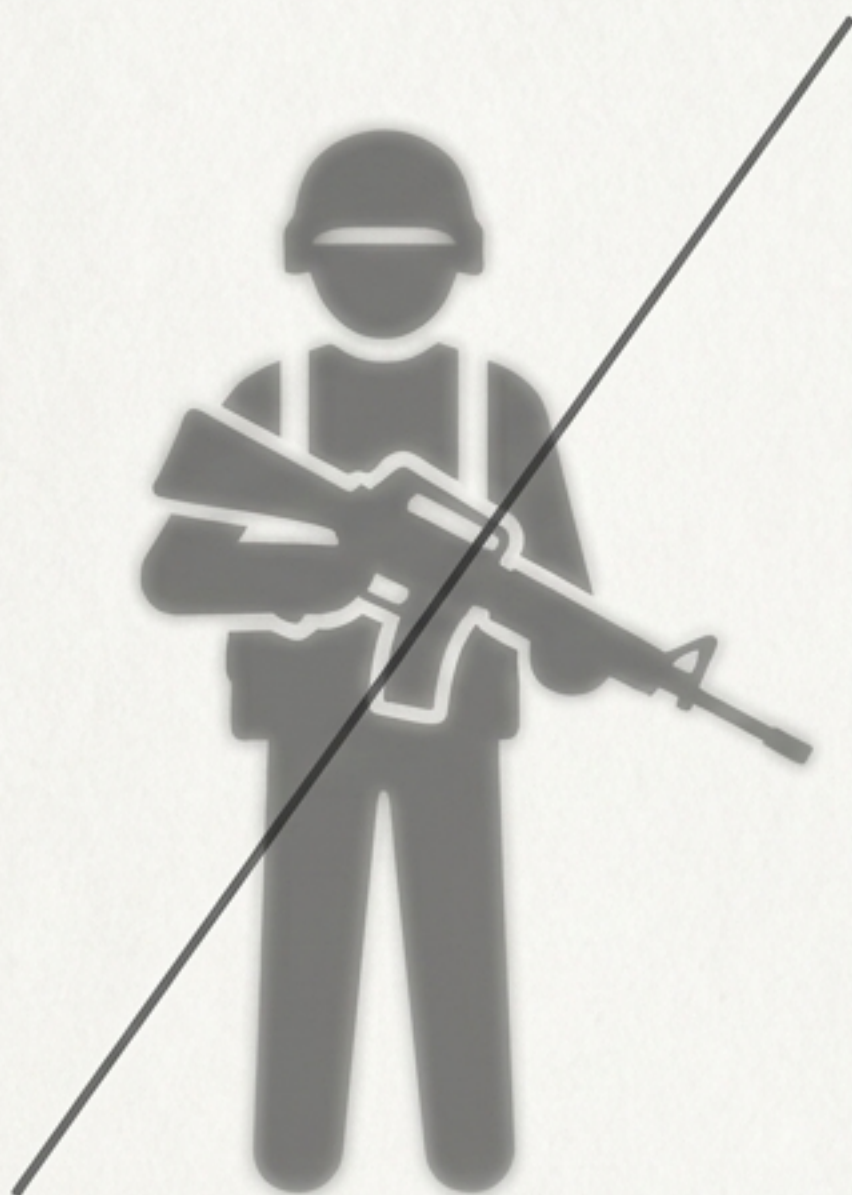
空の盾を再定義する： 次世代「多層防衛」 システムの幕開け

テラドローンの「Combat-Proven
(実戦証明)」アプローチが破壊する、
現代戦のコスト非対称性



「ロボットは血を流さない」 — 現代戦のルールの本来的変化

Key Takeaway: 人命リスクを排除した「完全無人化」が、戦場の新たなスタンダードとなる。



The Milestone

2026年4月13日、ウクライナ軍が歩兵を一切投入せず、ドローンと無人地上車両（UGV）のみでロシア軍陣地を制圧。軍事史上の転換点（完全無人突撃）。

Air-to-Ground Synergy

偵察・火力支援を行う空中ドローンと、機関銃搭載UGV「Droid TW 12.7」や自爆ロボット「Ratel」の精密な連携。

Rapid Evolution

実戦データが即座に開発にフィードバックされ、驚異的なサイクルで兵器システムが進化。

防空網を崩壊させる「経済的な敗北」

数億円のミサイルで数十万円のドローンを撃ち落とす構造は、防衛側の財政を急速に圧迫する。持続可能な防空には「経済合理性」を備えた新たな迎撃手段が不可欠である。

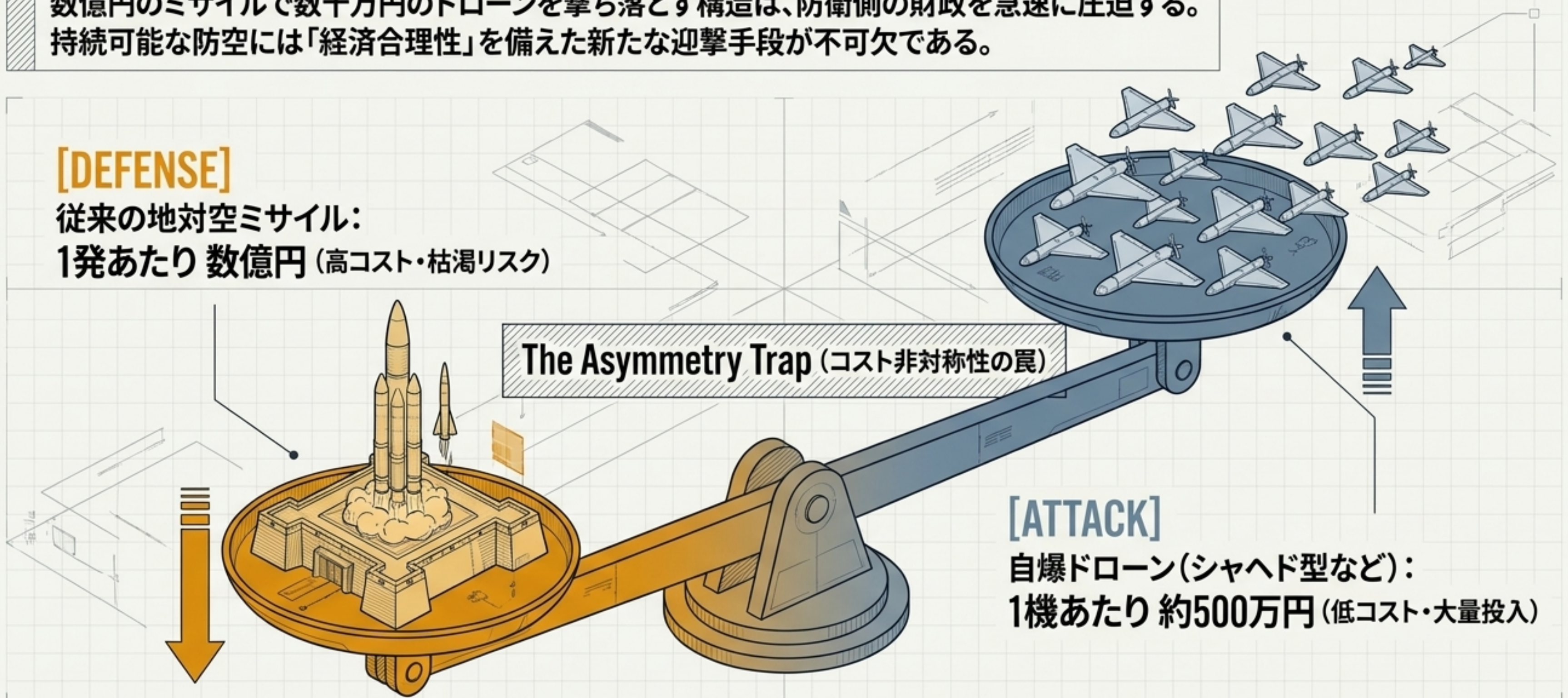
[DEFENSE]

従来の地对空ミサイル：
1発あたり 数億円 (高コスト・枯渇リスク)

The Asymmetry Trap (コスト非対称性の罠)

[ATTACK]

自爆ドローン(シャヘド型など)：
1機あたり 約500万円 (低コスト・大量投入)



テラドローンの戦略的転換と「Combat-Proven」への執着

2026年3月23日、防衛装備品市場への本格参入を表明。机上の空論ではなく、電子戦（ジャミング）が飛び交う世界で最も苛烈な環境で機能する技術を追求。

The Combat-Proven Loop

1. Industrial Foundation

産業用ドローンで培った開発・運用の高度な知見。

2. Strategic Pivot

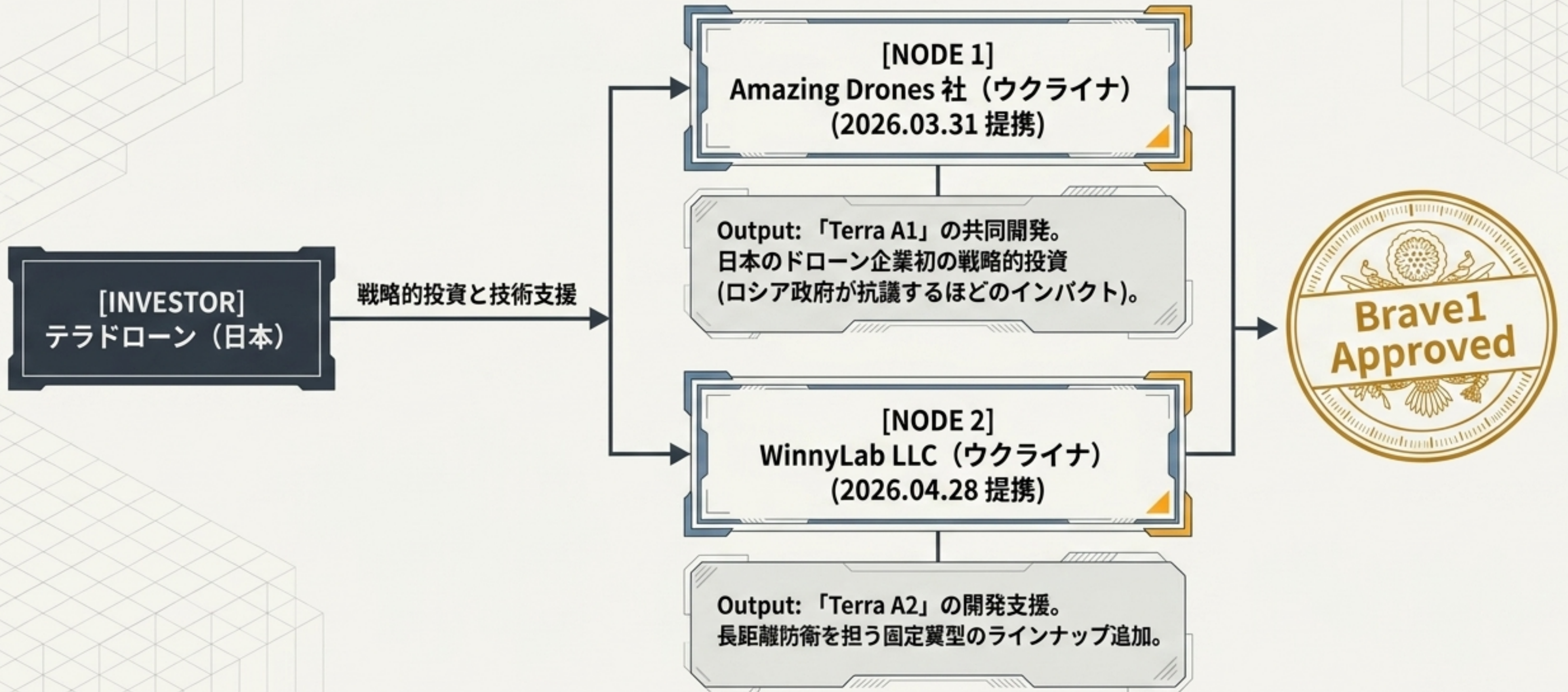
ウクライナ侵攻や中東情勢を受けた、迅速・低コストな防衛アセットの提供。

3. Real-world Validation

ウクライナの戦場における、ロシアの攻撃用ドローンの無力化（実戦証明）。

「短期間でトップランナーになり、世界トップ5を目指したい」
—— 徳重徹 CEO

ウクライナ・アライアンス：革新を加速する共同開発パイプライン



[Tactical Blueprint] Terra A1 : 短距離・高速迎撃ロケット型ドローン

コスト非対称性を破壊する、最終防衛ラインの要

Role:

短距離・高速迎撃（基地・重要インフラ防衛）

Performance:

最高速度 300km/h / 射程 約30km

Cost Efficiency:

1機あたり約2,000~3,000ドル(約40万円)。ミサイルに代わる圧倒的な経済性。

Combat Capabilities:

AI搭載による敵機の自動追尾。迅速な展開と即時発射、体当たりによる物理的無力化（破片浴びせ）。



Status:

COMBAT-PROVEN

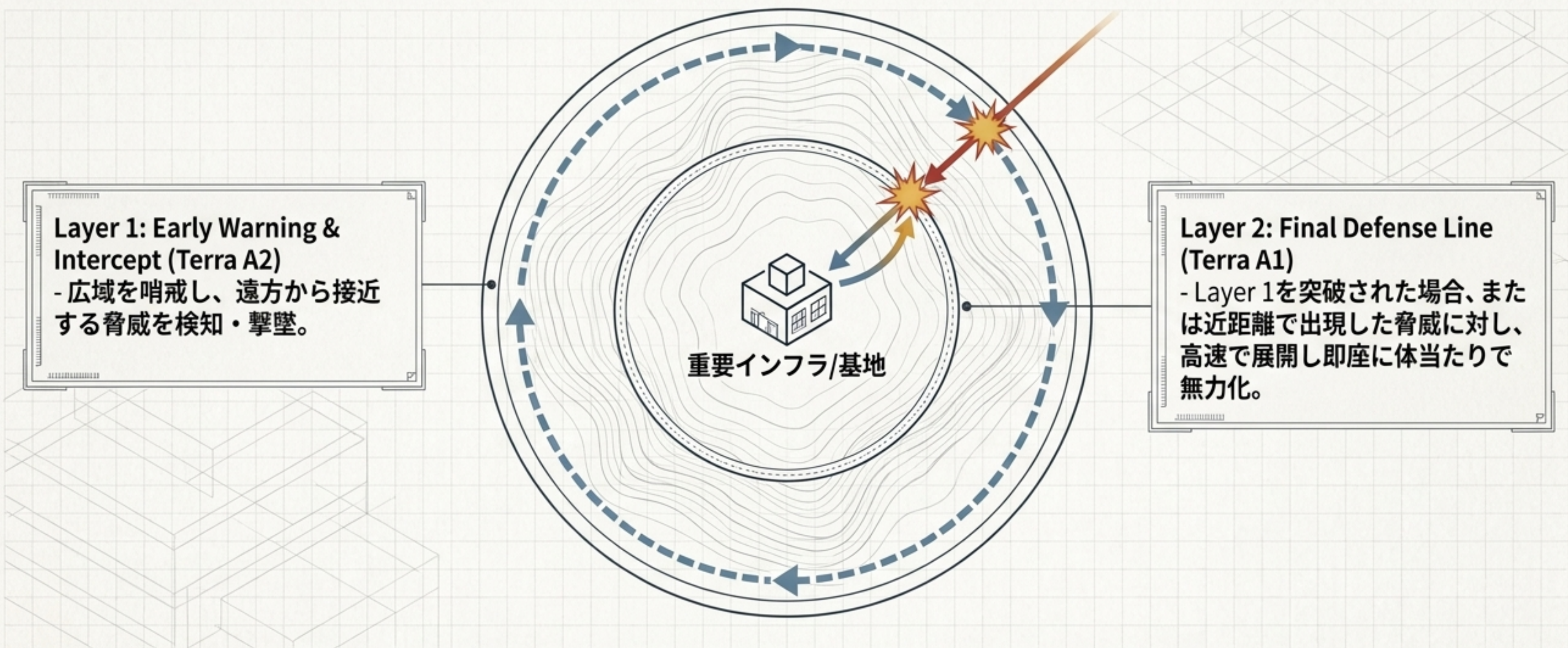
2026年4月17日実運用開始。直後の4月28日、ロシアが多用する長距離無人機（シャヘド型）の迎撃・無力化に初成功。

Comparison Matrix : 多様な脅威に対応するデュアル・ポートフォリオ

モデル (Model)	Terra A1	Terra A2
タイプ (Type)	ロケット型	固定翼型
主な役割 (Role)	短距離・高速迎撃 (最終防衛ライン)	長距離・広域防衛 (早期警戒)
最高速度 (Speed)	300km/h	312km/h
射程/航続距離 (Range)	約30km	75km
飛行時間 (Endurance)	短期決戦 (即時迎撃)	40分以上 (長時間哨戒)
戦術的特徴 (Feature)	迅速な展開・高機動性・即時発射	長い航続時間・広いカバー範囲

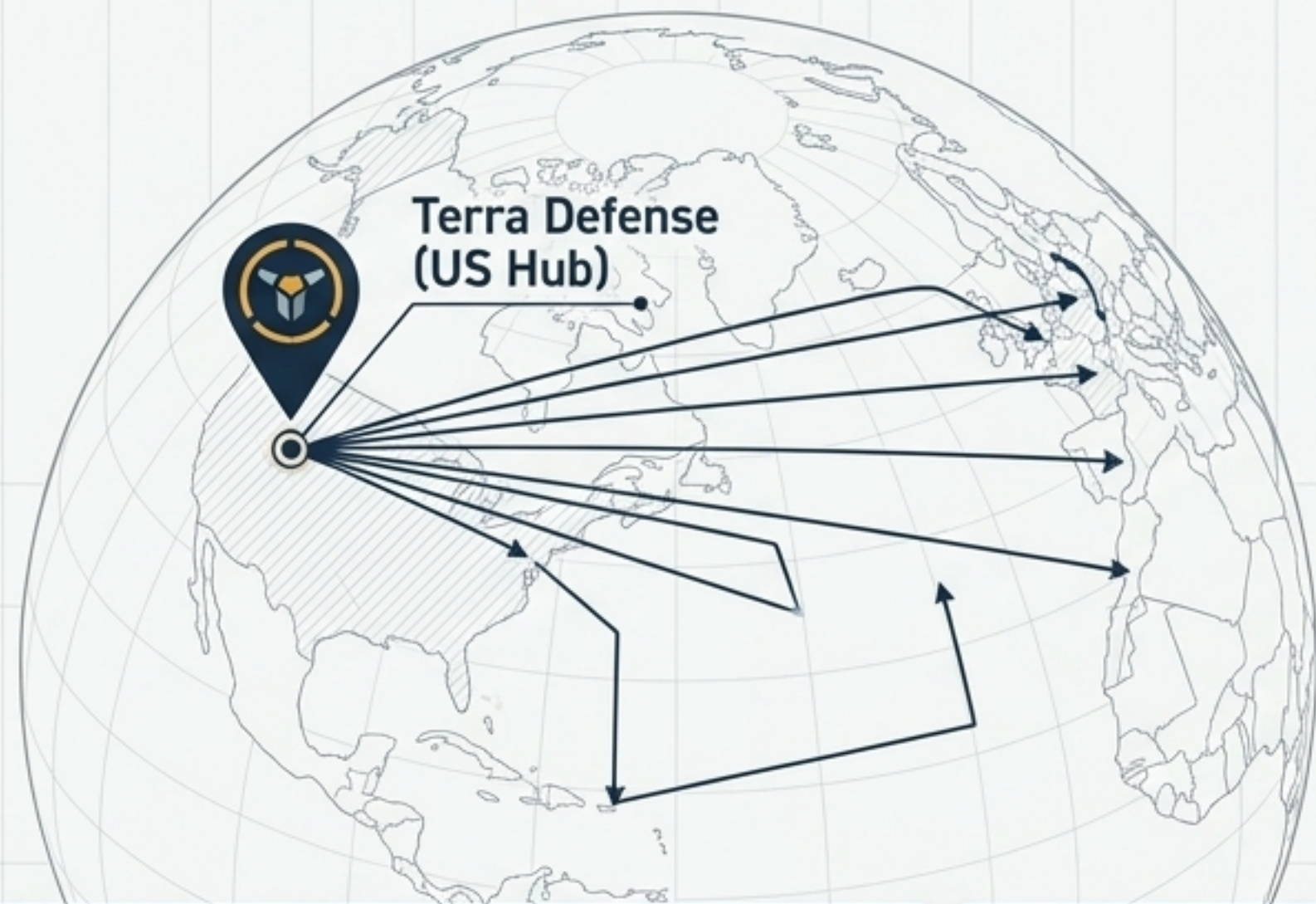
Layered Defense Architecture : 空間的な役割分担による多層防空網

異なる特性を持つアセットが織りなす、強固で柔軟な「空の盾」



Strategic Outcome: 高価な地对空ミサイル (SAM) を温存し、安価な迎撃ドローンで飽和攻撃を無力化する持続可能なシステム。

グローバル防衛市場へのスケールと「Terra Defense」の設立



約3兆6,335億円

(2030年の世界の防衛用ドローン市場予測規模)

1. 国家法人の追い風

日本政府は2026予算案で無人アセット関連に過去最大規模「約3,128億円」を計上。国家方針としての無人化推進。

1. 米国法人「Terra Defense」の設立

2026年度内に米国子会社を設立。製品の輸出入、技術連携、そしてグローバルなロジスティクス網の中核拠点。

2. 国家予算の追い風

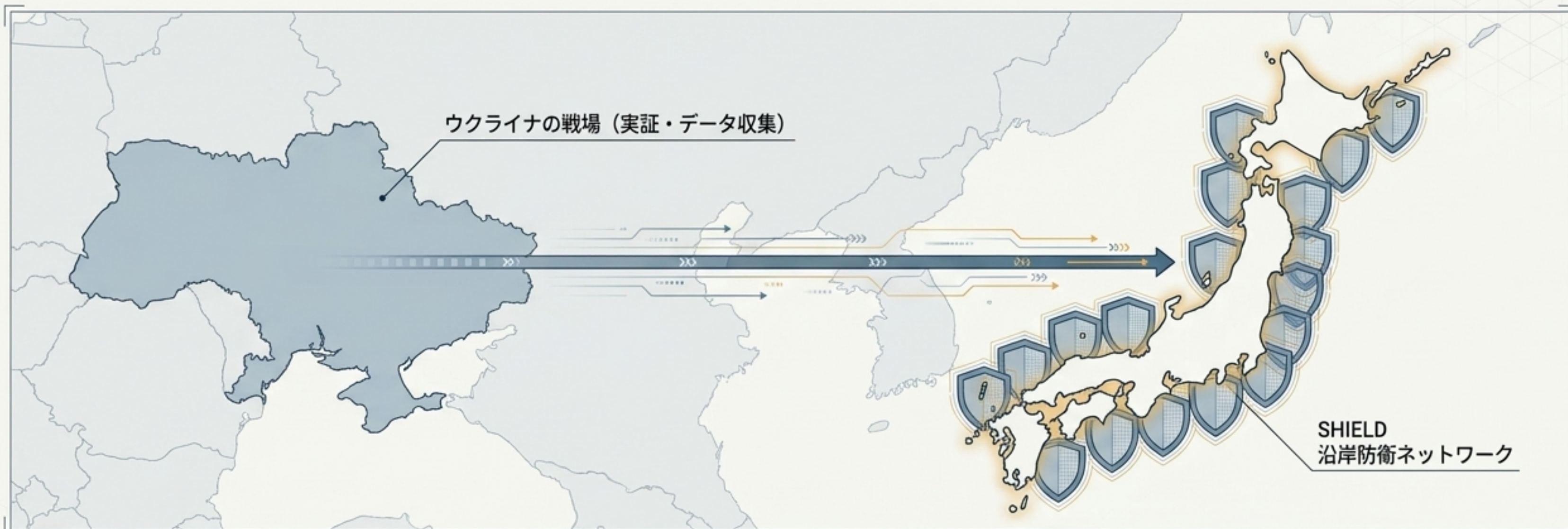
日本政府は2026年度予算案で無人アセット関連に過去最大規模の「約3,128億円」を計上。国家方針としての無人化推進。

3. グローバル展開のロードマップ

ウクライナでの実績を基点に、米国、NATO諸国、アジア諸国への段階的な輸出と展開。

リバースイノベーション：ウクライナの戦訓を日本の防衛へ還元

実戦データを逆輸入し、日本の多層的沿岸防衛体制「SHIELD」へ最適化

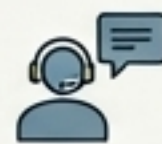


Contextual Briefing



「SHIELD」構想への適合: 日本政府が2027年度までの構築を目指す防衛体制の中核的アセットとして、Terra A1/A2の導入・最適化を推進。

Contextual Briefing



防衛大臣の課題認識: 「今の日本に攻撃型ドローンをつくる企業は無く、いかに自前で持てるかを真剣に考えなければならない」 (小泉進次郎防衛相 当時)

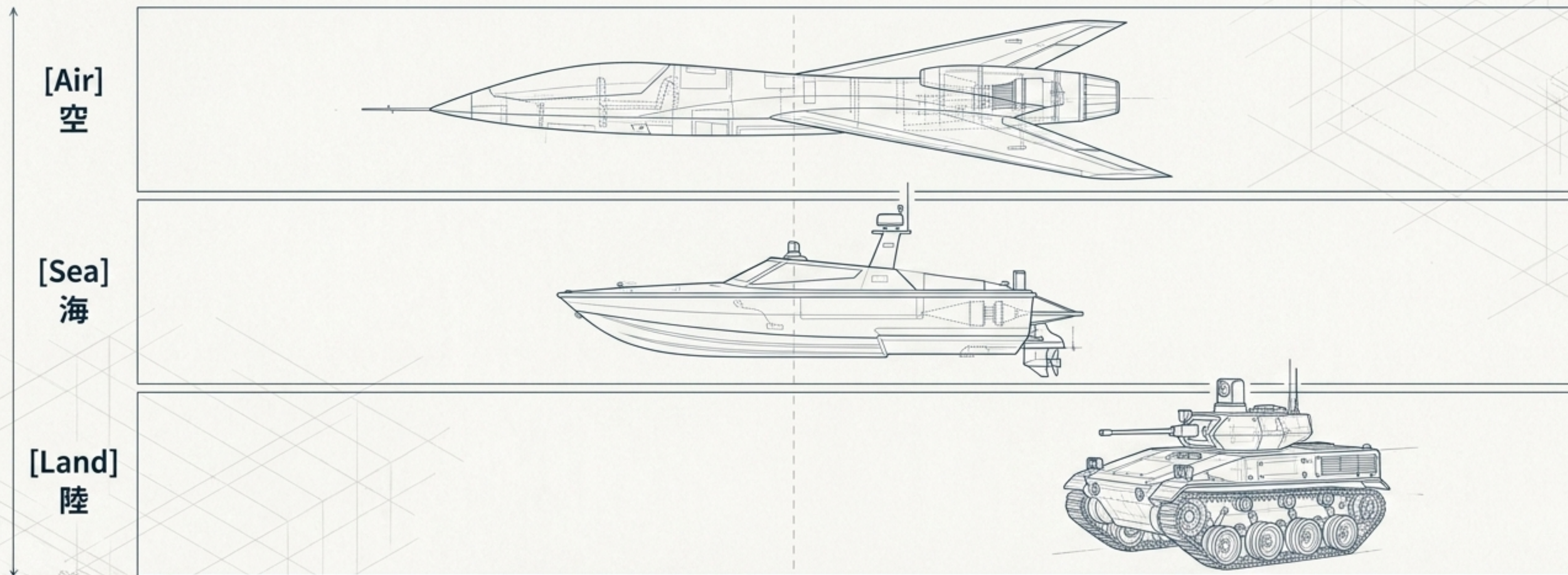
Contextual Briefing



The Mission: 輸入に依存しない国内生産・運用体制の確立が、将来の日本の安全保障の試金石となる。

Future Roadmap：全領域（クロスドメイン）の無人化構想へ

テラドローンが描く、次世代無人アセットのポートフォリオ拡充



Next-Gen Interceptors:

- ジェットエンジンを搭載した、さらに高速・高性能な迎撃ドローンの開発。

Cross-Domain Expansion:

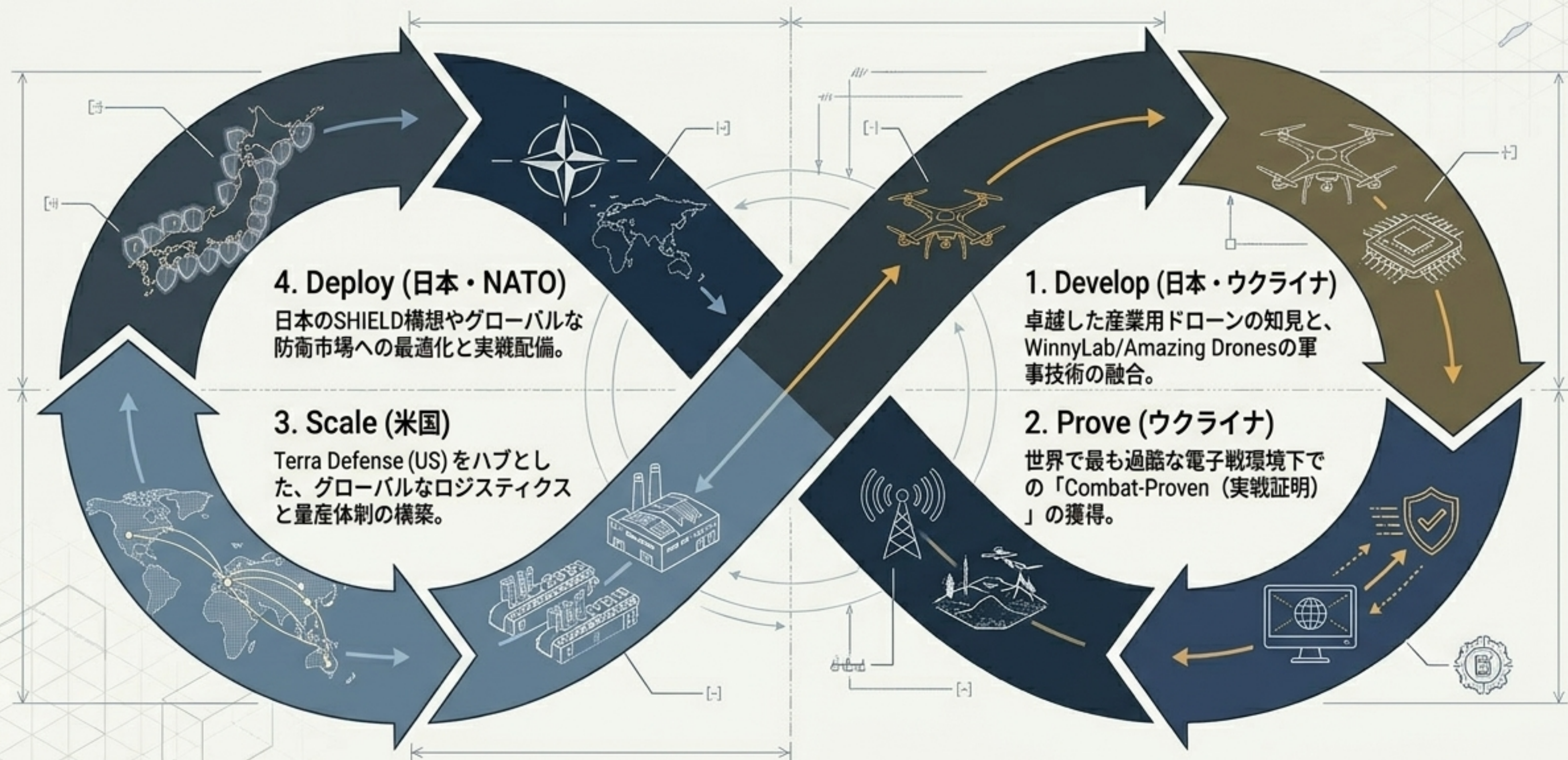
- [Air] 迎撃・偵察ドローンの進化
- [Sea] 無人ボート（USV）による海上防衛
- [Land] 地上無人車両（UGV）との連携強化

Vision:

- 陸・海・空を横断する統合的な無人アセット
- エコシステムの構築。

The Global Ecosystem：世界のトップ5へ至る成長ループ

「開発・実戦・量産・還元」の途切れないサイクルこそが、世界のトップランナーへ躍り出るためのコア・エンジンである。



経済合理性と持続可能性を 両立した、次世代の空の盾

現代の安全保障は、圧倒的な「コスト非対称性」という難題に直面しています。

テラドローンが構築する多層防衛システム (Terra A1 / A2) は、単なる低コストな代替兵器ではありません。

それは、最前線の実戦データに基づき、「ロボットが血を流す」未来の防衛基盤を現実のものとする、革新的な戦略アセットです。

日本発の技術が、世界の空のルールを変える。

次世代防衛のパラダイムシフトは、すでに始まっています。

[TERRA DRONE LOGO]